

新潟県小学校長会

校長会報

題字…今山政三郎氏

発行所

新潟県小学校長会広報部
新潟市中央区万代1-3-30
万代シティホテルビル3階
TEL 025-290-2231
FAX 025-245-6060
E-mail: nksgho@nigata-inet.or.jp
印刷所 株式会社 文久堂

「ふるさと」

新潟県小学校長会 副会長

荻野真美

ふるさとを強くもっている人は、
いくらでも遠くへ行ける

第七十七回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会の講演の冒頭で、講師外尾悦郎氏はこのように述べられました。単身バルセロナに渡り、四十七年間にわたり、アントニ・ガウディの建築サグラダ・ファミリアの彫刻家を務めている外尾氏だからこそ語れる言葉であり、教育に携わる私たちにとって大きな意味のある言葉であると感じました。

ところで、皆さんは、「ふるさと」をどのように捉えますか。私は、生まれ育った土地と捉えていました。外尾氏は、次のように語りました。『「ふるさと」とは、何も知らない子どもたちを育ててくれる場所。学校には、子どもにとつての『ふるさと』になってほしいのです。先生方一人一人が子ども』。『心の中に『ふるさと』があれば、

遠くに行っても、自分の信じた道を自分らしく生きて行けるのです。』

私自身も、恩師の言葉や姿を思い出したり、期待に応えたいと勇気が沸いてきたりしたことが何度もありました。私にとって、恩師は間違いなく「ふるさと」だったのだと思います。

子どもたちが自分の人生の礎を築いていく過程に関わる教職員はかけがえない存在です。子どもたちの心に宿り、「ふるさと」として支え続けられる教職員を育てていきたいと思っています。校長は、教職員の「ふるさと」でありたいものだと思います。学校の教育課題の解決や次期学習指導要領実施に向けての準備等を進めながら、教職員が教職という素晴らしい道をしつかりと歩んでいけるように、支え、心に希望の火を灯すことができる「ふるさと」でありたいと思います。

(新潟 小針小学校)

市 市 市
都 都 都
指 指 指
定 定 定
令 令 令
郡 郡 郡
政 政 政
だ だ だ

ひゃんでいいまち

「五泉」の人づくり

五泉市小学校長会

五泉市は、新潟県のほぼ中央に位置し、緑豊かな山々と清らかな川の流れ、肥沃な大地に恵まれた美しいまちである。タイトルにある「ひゃんで」とは、五泉の言葉で「すこく」「とても」という意味であり、市をあげてひゃんでい、まち五泉をアピールしている。

五泉市では、二こども園、九小学校、四中学校、一特別支援学校の校園長十六名で校園長会を組織し、活動している。

市の教育理念である「地域とつながり、夢と希望に向かって、未来を創る力」を確かにしていく子ども」の実現に向けて、校園長会として連携を密にして、毎月の定例会、各種研修会等に取り組んでいる。

一 こども園・中学校長会との連携

五泉市校園長会は、年間十一回の定例会を開催している。教育委員会からの指導・連絡に加えて、各学校園からの報告や情報提供、各種事業の推進状況等の情報交換、市への要望事項の取りまとめや確認等について、意見交換をしている。

こども園、中学校、特別支援学校の校園長と意見交換することで、幼児、児童生徒それぞれの発達段階や個々の

特性を踏まえた視点を獲得することができ、大変有意義な時間となっている。また、園・小の連携、小・中・特別支援学校の連携を進める上でも、大きなメリットとなっている。

二 各種研修会の開催

五泉市校園長会主催の研修として、例年、夏季休業中に人権教育、同和教育研修会を開催している。市内の全教職員を対象とした悉皆研修会であり、五泉高等学校や村松高等学校にも呼びかけている。今年度は、オンラインによる講師の講話を、各校で会場を設けて聴き、その後に各校で実態に応じた研修会を行った。講話を基にして、日ごろの取組や声掛けについて、互いの現状を語り合い見つめ直す有意義な研修会となった。

その他にも、学校管理研修会や各種研修会の報告等を通して、全会員で研修を深めている。今後も新しいアイデアを取り入れながら、会員一人一人の資質・能力の向上に寄与する研修を進めていきたい。

これからも、校園長会として緊密に連携し、ひゃんでいいまち「五泉」の人づくりに尽力していきたい。

大会の概要

第七十七回 全国連合小学校長会研究協議会

福岡大会 報告

期日 十月十六日(木)～十七日(金)
会場 福岡サンパレス 福岡国際会議場

第七十七回全国連合小学校長会研究協議会福岡大会が、「地方でのフルスペック参集型」は五年ぶりだった徳島大会に引き続いて開催された。

大会主題及び副主題は、「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」志をもち 多様な他者と協働しながら次代を創る人財を育む学校経営の推進」である。

【二日目】

一 開会式

松原修会長の、「校長としてどのような夢を描いていますか。未来の教育の姿をどのように描いていますか。今できることを見定め、着実に歩みを進める。その舵取りこそ、校長のリーダーシップにかかっています。」と、力強い挨拶で開会した。実行委員長挨拶、来賓祝辞、祝電披露と続き、厳粛な開会式となった。

二 文部科学省講話

文部科学省初等中等教育局主任視学官 田村学様より「当面する初等中等教育上の諸課題」という演題で講話があった。特に次期学習指導要領の改訂に向けた現在の状況について、日々の授業に直結する内容を取り入れながら

時間を感じさせないお話だった。

「多様な子供たちの『深い学び』を確かなものに」を実現するため、「①学習指導要領の構造化、②柔軟な教育課程編成、③探究の質的向上、④学習評価」の視点で、実際の学習の様子を紹介しながら、具体的な方向を示していただいた。深い学びで大切なことは、知識を「つなぐこと」により知識を高度化し、いつでも駆動する状態にすること。そして、知識をつなぐには、「活用・発揮」や「音声言語や文字言語でアウトプットする」ことが大切だとの言葉が心に残った。

三 全体会

大会日程、本部報告等の後、大会の主題・副主題の趣旨説明があった。大会実行委員の方の思いが込められた副主題に感銘を受けた。



四 分科会

一日目午後の分科会は、五領域十三分科会が二会場に分かれて行われた。

第Ⅱ領域「教育課程」の第六分科会「健やかな体」に参加した。研究課題を「健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントの推進」とし、二つの視点から二事例についての発表とグループ協議が行われた。

【分科会 視点①】

運動や体を動かすことが好きな児童を育成するカリキュラム・マネジメント
く広域町村で連携を図りながら学校の特色を生かし取り組む教育活動

生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向け、各種運動の行い方を理解し、身に付けさせ、日頃から運動に親しむ児童を増加させることを地区の小学校が連携して取り組んだ実践であった。「教員の資質向上」として若手教員の水泳実技指導の研修、小規模校における小中連携・地域連携の取組などが紹介された。

【分科会 視点②】

子どもが進んで体を動かし自らの体力向上や心身の健康について考えるためのカリキュラム・マネジメントの推進
く学校・保護者・地域の強みを生かした体力づくりの取組を通して

健康に関する今日的課題の解決のため、子どもが進んで体を動かし自らの体力向上や心身の健康について考え実践できるカリキュラム・マネジメントを行った報告であった。校長が実態分析を通して自校の強み・弱みを可視化したことが成果につながっていた。

【二日目】

二日目の全体会として研究協議のまとめと大会宣言が行われた。

一 講演会

「志す」というテーマで、聖家族贖罪聖堂(サグラダ・ファミリア)彫刻家として活躍されている外尾悦郎氏の講演が行われた。講演では、「学校をふるさとしてほしい。先生一人一人が子どもたちのふるさとである。」とのメッセージがあった。

二 閉会式

大会会長による閉会の挨拶、次期開催地(北海道)代表挨拶等があった。北海道大会のPVには、北海道の雄大な自然が鮮やかに紹介されていた。

学校紹介①

「みつばち」のように

新潟市立大形小学校

当校は、近くには商業施設や公園など、買い物やリフレッシュのための場所も多く、交通の利便性もよい位置にある。校区も広く、千人を超える児童数の時もあったが、現在は約七百二十名の子どもが通っている。

一 成長を目指して

教育目標は「たかめあう ささえあう」である。この教育目標の具現のため、教職員だけでなく、学校運営協議会でも、大形小学校の子どもの良さを、課題を話し合った。そこでは、挨拶がよい、一生懸命取り組み、地域を大事にして欲しいなど、様々な意見が出された。この意見をもとに、教育ビジョンを作成し、「みんなで認め合い、優しさで笑顔あふれる学校」プラス一歩のがんばりと成長を「を」を言葉にして様々な教育活動に取り組んでいる。

子どもへの取組に対して、称賛、承認、感謝、感激、尊重、応援を、機を逸することなく子どもに伝えることにより「子どものプラス一歩のがんばり」につなげている。地域の方々も、朝夕の見守り活動だけでなく、様々なボランティア活動に延べ五百三十回、一万七千人の方に参加していただき、子ども

たちに称賛、承認、感謝、感激、尊重、応援の言葉をたくさん投げ掛けていただいている。より多くの人からの言葉掛けが子どもたちのエネルギーとなり、子どもたちの成長につながっている。

二 異学年交流「みつばち班」

大形小学校は、「みつばち」の愛称で親しまれている。縦割り班は、みつばち班と呼ばれている。「みつばち」は、みんなで蜜を一生懸命集める習性があることから、「『みつばち』のように、大形小学校のみんなで、様々な活動に一生懸命取り組みましょう」という意味が込められている。

全校縦割り遠足「みつばち遠足」では、歩き疲れている班のメンバーに声を掛け、励まし合いながら、みんなそろってゴールを目指した。ゴールした子どもたちには、疲れ切った表情の中にも、達成感が満ちあふれていた。これからも「みつばち」のように、何事に対してもみんなで協力して目標に向かって取り組んでいく。



学校紹介②

緑の丘に 言葉あり

統合百周年の巡り合わせを子ども・地域と共に

小千谷市立東小千谷小学校

当校は、今年度統合百周年を迎えた伝統校である。大正十五年に、木津校と藤生校が統合し、地域に大切に育まれ現在に至っている。小千谷の偉人西脇順三郎氏による校歌の歌詞「緑の丘に言葉あり」にあるように、二百十一名一人一人の児童の声や言葉が大切に紡がれる学校生活を目指している。

一 地域とのつながりを基軸に

今年度百周年を迎えるにあたり、これを機に一層地域とつながりながら、子どもが主役の事業を行いたいと考えた。まずは子どもたちに取り組みたいことを募った。「地域をきれいにしたい」「みんなで祝い給食を食べたい」「バルーンを飛ばしてみたい」など、多くのアイディアが集まった。何ができるかを話し合い、子どもの出場を保障するために役割を委員会で分担した。スローガン、キャラクター、記念歌、記念ダンスなどの作成や地域への発信を子どもが行った。それらを受け、地域の商店街から百周年を契機に「にぎやかプロジェクト」として鯉のマグネット作成と飾り付けの提案を受けた。また駅からはグリーンカーテンの設置依頼を受けた。子どもの発信を受け地域の声が生まれ、実践となった。自ら働きかけ動くことで、他者とのつながり

喜ばれることを子どもたちは実感していた。運動会や音楽発表会、児童会行事等、子どもたちが発信した際には、保護者や地域から、付箋等で感想をたくさんいただいている。言葉を受け取り、言葉を返す営みを重ねている。



二 全職員で全児童を育てる

子どもたちのよりよい成長を促すために、複数の目で見守ることは有益である。そこで、低学年を除く全職員が入教授業を受けもつこととした。これにより教科のプロパーとしての技術を職員自身が学ぶことはもちろん、全職員で全児童を育てる意識が高まっている。子どもにとっては多くの職員と関わることで、心がつながる対象を増やすことができた。また、学年部主任を設定し、共通の空き時間を日課表に設置することで、学年部間の連携を強めた。

今後も、子どもたちが安心して学び、失敗できる学校であるために、地域の方々と共に新しい百一年目に向かっていきたい。

郷土記

広大な自然と人々の温かさが織りなす 「ふるさと」神林

村上市神林地区

はじめに

当校がある村上市神林地区は、広大な田畑に囲まれ、豊かな自然でいっぱいです。四季折々の風景が織りなすこの地は、子どもたちの学びのキャンパスです。特に、一日の終わりに、ゆつくりと日本海へ沈んでいく夕陽が、グラウンドの木々や空を茜色に染め上げる感動的な美しさを見せてくれます。神林地区は、神納地区と平林地区からなっています。今回は当校がある神納地区の歴史について紹介します。

地名のはじまり

平安時代、源頼義、義家親子が帝より宣旨を賜り『八幡大神、聖母大神（神功皇后）、仲哀天皇』の三神を桃川八幡神社に奉祀しました。これが神応（カノウ）の庄となり、嘉納の庄↓加納の庄↓神納に変遷したと言われています。元々、神納平野は岩船潟（琵琶潟）を囲むようにできていました。そこは沼地であり、埋め立てた地が西神納地域です。米沢上杉博物館所蔵の越後国瀬波郡絵図（国宝）にも沼地だった様子が描かれています。

国指定史跡 山元遺跡

山元遺跡は、日本海沿岸東北自動車道の村上市瀬波温泉―C新潟寄りの山元トンネル真上に位置しています。この遺跡は、日本海沿岸東北自動車道路建設に伴う発掘調査が行われた際に発見された遺跡です。今から一九五〇年前の日本海側最北の弥生時代高地環濠集落としてその重要性が認識されています。山元遺跡で出土する弥生時代後期の土器のほとんどが東北系の土器であり、北陸系の土器や北海道系の土器、いわゆる縄文土器も少量ながら見付かっています。北とのつながりはお墓の埋葬形態でも垣間見ることができま

す。つまり、山元遺跡は村上を含めた



「縄文の里 朝日」
展示品

村上市公式HPより
遺跡風景（南西から）

周辺地域に住んでいた東北系の土器を使う人々が高台に築いたムラで、西や北の要素を採り入れて暮らし、その人々と交流していたことが分かりました。それは、発見された土器や金属器などの遺物からも明白だそうです。



使用されていた土器が東北系と縄文系が混在すること、高地性環濠が県北に存在したことは、誠に希少性に富むものと考えられ、大変貴重な遺跡であると位置付けられています。

右2枚写真：「縄文の里 朝日」展示品

旧神納小学校のお宝

藩が県にかわり、新潟県となった一八七一年の二年後に、当時の桃川村区長である佐藤千尋氏の尽力により、旧神納小学校が開校しました。桃川村佐藤敬三氏宅にて、『発蒙舎』と呼ばれていました。

明治十五（一八八二）年（一八八五）年まで文部省が、地方教育奨励のために教員や学校に図書や器具などを



等級によって与えたものが「三等奨励品目録」です。校名が「町立有明校」と記されていますので、有明の光浄寺に学校があった頃と考えられます。開校まで校内に掲示されていた。

おわりに

当校は、全学年において地域人材や地元企業と関わる体験学習が充実しています。古代の人々が行っていたように、この恵まれた自然及び学習環境の中で、子どもたちに故郷への誇りと限りない夢を育み、地域に根ざし、未来へ羽ばたく人材の育成を、これからも目指していきます。

※参考資料

「令和二年度村上市中央公民館講座「神納・神納東各集落の歴史」」
「シンポジウム 山元遺跡は何を語るのか―邪馬台国前夜の村上― 記録集 村上市教育委員会」

県小学校長会 HPへアクセス



学校経営に役立つ
情報満載